

研究ノート

文末に現れる接続助詞カラの機能

The Function of the Conjunctive Particle *Kara* at the End of Sentences

孫 思琦 (Siqi SUN)

筑波大学人文社会科学研究科国際日本研究専攻 博士後期課程

本研究は、日本語の接続助詞カラが文末に使用される状況において、新たな機能が生じている現象を概観して整理したものである。考察はカラが文末に現れた際の談話構造に基づいて行われ、文末のカラには 1. 「話し手の共感を示す・聞き手に納得させる」、2. 「聞き手の行動を促す」、3. 「話し手の否定的な態度を表す」という 3 つの新たな機能が生じることを確認した。そのうち、1. 「話し手の共感を示す・聞き手に納得させる」カラは、前文脈に出現した発話と呼応して使用される共話的なカラであるが、2. 「聞き手の行動を促す」カラ及び 3. 「話し手の否定的な態度を表す」カラは、前文脈と明らかな呼応関係がない対話的なカラである。

文末に現れるカラの用法には、接続助詞の本来の用法から離れ、新たな用法には 1. のような、接続助詞としての性格を保っているものや、3. のような、接続助詞の性格が希薄化して単なる「対人関係的機能」を果たしているものもある。本稿が分析するカラの文末用法は、元来主に文中で使用される接続助詞であったものが、文末に用いられることによって、主節との繋がりが徐々に失い、新たな機能を獲得したと考える。

In the present paper, I have tried to summarize the phenomenon that using Japanese conjunctive particle *kara* at the end of sentences creates new functions. Discussion is based on the discourse construction when *kara* appears at the end of sentences. As a result, it was found that three functions are newly created: (1) to express sympathy or to try to convince; (2) to urge the interlocutor to do something; and (3) to express the speaker's negative emotion. I also note that *kara* is used in a *kyōwa* (collaborative dialogue) when it is expressing sympathy or trying to convince and used in a *taiwa* (non-collaborative dialogue) when it is urging the interlocutor to do something or expressing speaker's negative emotion.

As an end-of-sentence expression, *kara*'s functions are different from the traditional functions of Japanese conjunctive particles. Among them, you will find that some *kara* serve the same basic function as a Japanese conjunctive particle, and you can also find some *kara* which only serve a interpersonal function are separated from the traditional one. *Kara*'s function as an end-of-sentence expression used to be similar to that of Japanese conjunctive particles, but it is losing the connection with main clause and now achieving new functions.

キーワード：文末表現 メタ機能 心的態度 文法化

Keywords: End-of-sentence expressions, Metafunction, Mental attitude, Grammaticalization

はじめに

現代日本語の接続助詞は、基本的に複文で使用されるという構文上の制約を有する品詞である。このことを最初に指摘したのは、山田 (1908) である。その後、時枝 (1950)、橋本 (1964) などで先駆的研究を継承した研究により、接続助詞の構文・意味の特徴の全体像がかなり明らかになった。最近では、文末に現れる接続助詞を取りあげた研究も現れ (白川 2009、許 2010 等)、接続助詞の文末用法

が次第に注目されつつあるが、文末表現として果たした機能は実に複雑で多様なため、それに関する記述はまだ不十分である。本稿は、Halliday (1970) が提唱した SFL 理論の3つのメタ機能に基づき、カラが文末に現れることによって獲得した機能を、事例観察から明らかにすることが目的である。

1. 文末に現れる接続助詞カラに関する先行研究

接続助詞で言い終わる文は、従来より「言いさし文」とも呼ばれ、その包括的な研究として、書き言葉のデータに基づいた白川 (2009) がある。白川は文末に使われる接続助詞の用法を、文脈に従属節の内容と関わるべき事態が存在するか否かによって、「言い尽くし」と「関係付け」に二分した。「言い尽くし」は関係付けられるべき事態が文脈上に存在しないのに対して、「関係付け」は関係付けられるべき事態が文脈上に存在するという用法である。

文末に現れるカラにも「言い尽くし」の用法と「関係付け」の用法がある。前者は聞き手に何らかの行為を実行させられるために参照情報を提示して「理由を表さない」ものであるが (1)、後者は理由を提示することによって、相手 (または自分) に納得させるという談話的な機能を備えると指摘されている (2)。

(1). 英一：「(ジロリ) なにしにきたんだヨ」

耕作：「金、貸してくれヨ。五千元」

英一：「ないね」

耕作：「三千元」

英一：「(空ッポの箱を開けて見せて) ホラ、借りたいのは、俺の方や」

耕作：「倍にして返すからサ。デートなんだ」

英一：「(腕時計をはずして) うるさいなア、もってけよ」

耕作：「(もらって) ワルイ。もつべきものは友達だ」

(市川森一『夢帰行』 p.114 白川 2009:54 より再掲)

(2). 時枝：「自炊はどう？ 外食より、お金かかってんじゃない？」

栄介：「章ちゃんが、上手くやってくれてるよ。」

時枝：「...そう。あの人、意外とケチそうだからね。」

(市川森一『黄色い涙』 p.128 白川 2009:111 より再掲)

一方、許 (2010) はカラの基本義から出発し、白川 (2009) が言う「理由を表さない」カラをその本来の用法から派生したものと考えて、「働きかけの理由を表す」カラ (3) としているが、白川 (2009) による理由を提示するカラを「判断の理由を表す」カラと見なしている (4)。

(3). 良雄：「(顔を出し) お兄ちゃん。」

耕一：「うん？」

良雄：「近所から苦情が来るから。」

耕一：「なんで？」

良雄：「九時前からダンダンガンガン。」

(『ふぞろいの林檎たちⅡ』 許 2010:78 より再掲)

(4). 実：「なんにもいわないじゃない。」

知子：「いちいちいうと、あんたうるさがるから。」

(『ふぞろいの林檎たちⅡ』 許 2010:74 より再掲)

白川 (2009) と許 (2010) は「理由」という用語に対して捉え方が異なっているが、カラの文末用法の考えに大きな分岐がなく、いずれも「理由」の用法と、働きかけの用法があると主張している。これらの用法は、カラによって導かれた事柄と現実の事実関係 (前田 1991、2009 では「リアリティー」と呼ばれている) に相違が見られ、「理由」のカラは既に事実になった結果、働きかけのカラはこれから起こりうる聞き手の行動と繋がっているため、本研究では前田 (1991、2009) の用語を参考にした

上で、前者を「原因・理由のカラ」、後者を「条件のカラ」と呼ぶことにする。

以上、先行研究で指摘されたカラの文末用法を概観した。これらの文末に現れたカラは、いずれも文中のカラの用法と強い連続性が見られるため、文中用法の変種として特別な扱いをする必要がないと指摘されている（白川 1991）。文中用法と連続性がある証拠として、先行研究で挙げられている文末のカラは、いずれも前後の文脈によって文中のカラに還元できることが挙げられる。下記の（1'）と（2'）は、（1）の「倍にして返すから」、（2）の「あの人、以外とケチそうだから」から還元されたものである。

（1'）倍にして返すから、金貸してくれヨ。

（2'）あの人、意外とケチそうだから、上手くやってくれてるよ。

ところで、カラの文末用法は文中用法と常に連続しているわけではなく、次の（5）のように複文に再現化できないものもある。

（5） 幹雄：「ね、礼と健っていつから一緒なんだっけ？」

礼：「小3。」

幹雄：「もう人生の半分以上一緒なんだな。」

礼：「別に。ずっと一緒のクラスだったわけじゃないし。」

幹雄：「でもすごいよね！」

礼：「ただの腐れ縁ですから!!」

『プロポーズ大作戦 第3話』

（5）のカラは「礼」が反対意見を表す際の発話に後続しているが、「幹雄」に自分の意見を納得させるための「原因・理由のカラ」と解釈しうるほか（5'a）「礼」が現状の改善を図ろうとする立場から「条件のカラ」としても理解できるため（5'b）主節に相当する内容を強いて発話すると、文末表現として伝わった話者の心的な態度に興味深い変化が見られる。（5'a）、（5'b）のような話し方を取ると、（5）で「幹雄」の発話に怒った礼のイメージは、無関心で冷静に一変したのである。

（5'a）礼：「ただの腐れ縁ですから、すごいことではありません。」

（5'b）礼：「ただの腐れ縁ですから、この話をやめてください。」

文末のカラを単なる文中用法の変種として扱うと、（5）のような用例が説明できなくなることは、文末用法を文中用法の変種だけに位置付ける考え方に妥当性が欠けている証拠である。一人の話し手で情報を伝えた（1'）と（2'）と比べ、（1）（2）（5）のカラは、ターン交替のある談話に置かれたからこそ、それなりの使い方がありうるので、次節でまず談話構造の面から、文末に現れるカラを分類する。

2. 文末のカラが持つ談話構造

二人がお互いに協力しあいながら話の流れを作るという話し方は、水谷（1987）より初めに「共話」と定義された。具体的な表現形式について、ザトラウスキー（2003）は「二人以上の話者が作り上げる統語上の単位（句・節・複文）からなるもので、後の話者が先の話者の発話を付け足したり、その発話を完結させたり、先取りしたり、自分の発話に取り込んで言ったり、言い換えたりする発話」と説明している。一方、「共話」と対立する「対話」という話し方は、共通理解を前提としない、話し手自身が伝えたいことを言い尽くすのが特徴である。本研究で取り上げたカラで言い終わる表現は、途中まで話しかけた発話として、ターンの交替を図るように見えるので、先行研究でよく典型的な「共話」と扱われている。

再掲(2). 時枝:「自炊はどう? 外食より、お金かかってんじゃない?」
 栄介:「章ちゃんが、上手くやってくれてるよ。」
 時枝:「...そう。あの人、意外とケチそうだからね。」

再掲(4). 実:「なんにもいわないじゃない。」
 知子:「いちいちいうと、あんたうるさがるから。」

再掲した(2)、(4)の会話には二人の話者がいて、また後の話者が先の話者の発話に対して、何か新しい要素を付け足したため、ともに「共話」の用例といえる。(2)で「時枝」はカラで言い終わる表現を用いて、先行する話者「栄介」が伝えた事実「上手くやってくれてる」に、その原因にあたる情報「あの人、意外とケチそうだ」という情報を加えている。同様に(4)も、「知子」が「実」の文句「なんにもいわない」に対して、「いちいちいうと、あんたうるさがる」という理由をカラによって付け加えたのである。(2)(4)に限らず、「原因・理由のカラ」の用例は、すべて原因・理由にあたる情報を後付けしているパターンのものである。これらの会話例は、カラ節が会話の文脈によって複文の従属節に還元でき、さらにカラの前件と後件が異なる話者によるものなので、ザトラウスキー(2003)の記述した「共話」そのものと言える。

ところで、カラで言い終わる表現はすべて「共話」に用いられるわけではない。途中まで話しかけたように見えても、「共話」として捉えにくい「対話」の用例もある。「条件のカラ」、また先に挙げた(5)はこの類にあたる。

再掲(1) 英一:「(ジロリ) なにしにきたんだヨ」
 耕作:「金、貸してくれヨ。五千円」
 英一:「ないね」
 耕作:「三千円」
 英一:「(空ッポの箱を開けて見せて) ホラ、借りたいのは、俺の方や」
 耕作:「倍にして返すからサ。デートなんだ」
 英一:「(腕時計をはずして) うるさいなァ、もってけよ」
 耕作:「(もらって) ワルイ。もつべきものは友達だ」

再掲(5) 幹雄:「ね、礼と健っていつから一緒なんだっけ?」
 礼:「小3。」
 幹雄:「もう人生の半分以上一緒なんだな。」
 礼:「別に。ずっと一緒のクラスだったわけじゃないし。」
 幹雄:「でもすごいよね!」
 礼:「ただの腐れ縁ですから!!」

再掲した(1)は、既に述べたように「倍にして返すから、金貸してくれヨ」という複文に還元できるが、カラの前件と後件は同一話者によるものなので、先の話者の発話と関係付けようとするより、いくつか情報のやりとりを挟んで自らの発話を分けて述べるだけである。一方、(5)はそもそも主節にあたるものは存在しない、しかもカラ節の話し手に先行した内容を自分の発話に取り込もうとする意志も見られない。どれもザトラウスキー(2003)の基準から外れたため、(1)と(5)は「共話」ではなく、「対話」と言ったほうが妥当であろう。

3. 理論的な枠組み—SFL 理論

ここでは、文末に現れるカラの機能を、それを取り巻く談話構造に基づいて検討する前に、本研究の考える機能とは何かを説明したい。談話構造の観点から接続助詞の文末用法を考察する先行研究は余りなく、ターン交替と関わる点で文末の接続助詞と共通しているあいづちの研究が代わりに参考できる。

あいづちの機能に関する研究は、豊富な研究の蓄積があり(松田1988、ザトラウスキー1993、メイナード1993、堀口1988, 1997など)、その中で「聞き手の行動に関する機能」に重きが置かれた考え

は、本研究にも有益である。例えば、堀口（1997）はあいづちの機能を、ターンを続行させることによって聞き手に働きかけるとされているが、これを承けて同じくターンの続行を促す「原因・理由のカラ」「条件のカラ」も、因果関係・条件関係といった論理性を表す機能だけではなく、対人的な面にも働くことが考えられる。このような言語機能の多重性を扱う理論として、Halliday（1970）で提唱したSFL理論があり、中に言及された3つのメタ機能——「観念構成的機能」、「対人関係的機能」、「テキスト形成的機能」は、それぞれの定義は次の通りである。

〔観念作用的機能〕 言語が世界についての経験を伝達し、解釈する手段として機能する場合。

〔対人関係的機能〕 言語が話し手の態度の表出とか聞き手の態度や行動に対する影響力として機能する場合。

〔テキスト形成的機能〕 言語がテキスト（すなわち、言語が話し言葉、あるいは書き言葉の形で具現化されたもの）を形成する手段として機能する場合。

本研究で扱う文末のカラは、不完全であっても、完全な文と同じように会話で用いられてテキストを形成しているため、「テキスト形成的機能」を有すると考えられる。また、2節でも言及したが、同じ会話であっても、談話構造によって「共話」と「対話」の対立があるので、本研究で扱うカラの「テキスト形成的機能」をより細かく捉えれば、「共話」カラと「対話」カラがあるとしている。

次節から「観念作用的機能」と「対人関係的機能」を中心に考察を行う。

4. 考察

分析のデータとしては、比較的に文脈がわかりやすく、かつ人の感情の起伏を描くことの多いドラマシナリオから収集した用例（計213例）を用いる。

（1）共話に用いられる文末のカラの機能

具体例として次の（6）、（7）を挙げる。

- （6） エリ：「うーん、2週間でわかったのってこれくらい？」
幹雄：「それって全部最初の挨拶の時に言ってたじゃん。」
エリ：「だってそれしか情報ないんだもん。」
礼：「あの人黙々と授業やってるだけだからねー。」

『プロポーズ大作戦 第3話』

- （7） 惣一：「随分老けたかな。ま、私も人のことは言えんが。」
悠里：「ママはまだ綺麗よ。あの年で奇跡のように。」
惣一：「浮世離れした女だったからな。」

『GOLD 第9話』

（6）の「礼」はカラによって「それしか情報がない」という現状が成り立った理由を追加する。また（7）で、「惣一」は「ママはあの年なのに、奇跡のように綺麗だ」との事実が成立できる理由として、カラによって「浮世離れの女だった」という情報を補っている。この類のカラは、前述したように先行研究の「原因・理由のカラ」にあたるものであるため、因果関係のある情報を補完するために用いられるため、この発話時点における話し手の態度を確認するために、カラの前件、後件に現れるモダリティ表現を観察すると、明らかな共起関係を持つ表現として、確認を示す終助詞の「ね」「な」、同意を表すあいづち表現「そう」「そうですね」がある。共話的なカラを使う際に、聞き手に「共感を示す」という話し手の心的態度の傾向が見られる。したがって、共話的なカラの機能は次のようにまとめられる。

共話に用いられるカラの機能：理由となる情報を提示することによって、聞き手に納得させるか、話し手の共感を示す。

共話に用いられる文末のカラは、形式上に節と節を繋ぐというカラが本来持つ接続用法から離れているが、カラの前件と後件が因果関係を持つという「観念作用的機能」が働くことを考えれば、先行研究にも指摘されたように接続助詞としての性格を多く保っており、接続用法の延長線に位置付けられるのである。

(2) 対話に用いられる文末のカラの機能

対話に用いられる文末のカラは、相手の情報を補うことなく、独自に新しい情報を引き出すことで、共話に現れる文末のカラと区別しているが、文末のカラで果たしている「観念作用的機能」「対人関係的機能」の違いによって、さらに次2つの種類に細分できる。

1つ目は、物事が自分の望む通りに進めるために、条件を提示して聞き手の行動を促すカラである。先行研究では「条件のカラ」と扱われるこのタイプのカラは、その機能を次のようにまとめられる。

対話に用いられるカラ I : 条件となる情報を提示することによって、聞き手の行動を促す。

(8) (幹雄が健に電話している)

幹雄：「健？ふざけんなよ！携帯ずっとつながらないし、お前今日の合コン連絡ないってことはちゃんと向かってんだよな？待ってるからな！」

『プロポーズ大作戦 第6話』

そして(8)と同じく、聞き手の行動を促す機能を果たしている、文末のカラに見えるようなカラもある。

(9) エリ：「礼が渡しな。さっきあんな酷いこと言ったんだから。」

(エリが礼に花束を渡す。)

『プロポーズ大作戦 第3話』

(10) 洸：「廉。すまない。」

廉：「うん？何が？」

洸：「僕の為に、選考会に。」

廉：「まあ人生色々ありますよね。」

洸：「何か、手伝えることがあったら言ってくれ。精一杯応援するつもりだから。」

廉：「応援ね。いいけど、弱気の虫をうつさないでくれよ。」

『GOLD 第10話』

(9)(10)と(8)との異なる点は、行動を促すための情報を提示すると同時に、発話に後続している点である。違いが生じる原因は、(9)と(10)は情報を提示するのみで行為要求が伝えられないリスクが高いのに対して、(8)は、白川(2009)にも示唆したように、会話双方が暗黙の前提をお互いに了承し合ったため、情報を提示するだけでも行為要求が順調に伝達できるのである。

対話に見られるもう一つの文末のカラがある。この類のカラはすべての用例が話し手の反論・苛立ちを表し、否定的な強い個人主張を述べるのが特徴的である。このような用法は、先行研究になく、白川(2009)、許(2010)で主張された分類のどれにも当てはまらないことがわかる。

(11) 礼：「絶対嫌だ！！日直の仕事全部私にやらせる気でしょ。」(a)

健：「...日直！？」

礼：「絶対嫌だから。」(b)

『プロポーズ大作戦 第3話』

対話に用いられるカラⅡの機能：話し手の主張を表すことによって、否定的な態度を伝える。

対話に用いられるカラⅡで伝わったことは、原因・理由または条件のような、客観事実の情報ではなく、話し手自身が持っている主観的な主張である。また同じ話者による発話 (a) と (b) は内容もほぼ同じであるが、(a) の「絶対嫌だ！」と比べ、(b) の「絶対嫌だから。」は感情表出の段階にとどまっておらず、相手への批判の姿勢もより明確に示したことで、ただ「観念作用的機能」を果たす(11)の (a) より、もう一つ「対人関係的機能」も備えるようになったことがわかる。一方、主節に相当する内容がなく、接続の用法としても考えにくいから、接続助詞カラの本来の用法から最も離れているカラと考えられる。

5. 結論

以上、談話構造を踏まえ、文末に現れるカラが果たしている機能を検討した。考察結果のまとめ及び先行研究との対応関係は次の表 1 にまとめられる。

表 1. 文末に現れるカラの機能と先行研究との対応関係

| | 本研究 | | | 先行研究 |
|---------|-----------------|--------------------|-----------|----------|
| | 観念作用的機能 | 対人関係的機能 | テキスト形成的機能 | |
| 用法 ① | 原因・理由となる情報を提示する | 聞き手に納得させる話し手の共感を示す | 共話 | 原因・理由のカラ |
| 用法 ② | 条件となる情報を提示する | 聞き手の行動を促す | 対話 | 条件のカラ |
| 用法 ③ | 話し手の主張を表す | 否定的な態度を伝える | 対話 | なし |

これらのカラは多かれ少なかれ、本来の機能の接続の用法から離れ、新たな用法には用法①②のような、接続助詞としての性格を保ちながら発達していくものもあり、用法③のような、接続助詞の性格が希薄化しているものもある。この言語変化の発生には次のような理由が考えられる。

接続助詞カラの成立を通時的に見る山口 (1996) によれば、近世後半期までの文献にはカラの接続用法はまだ目立たず (12)、現代語のカラが表す原因理由を接続する用法は文脈に依存する形で、やがて近世後半期の江戸語で明示化した (13) ことが指摘されている。

(12) かふ言出スからは恥ずかしい事はごんせぬ サア返事して下さい

(『伎・心中鬼門角』山口 1996 より再掲)

(13) 汐時がよう御座りますから、舟はたちまちで御座ります

(『洒・遊子方言』山口 1996 より再掲)

そして、本稿で議論してきた、接続助詞カラが文末用法として持つ新たな機能も、こうした推移と見ることができる。元々文中表現である接続助詞カラは、談話において従属節と主節が分かれて共話的に使われたり、また、従属節だけでも話し手の意思を伝えたりするようになったため、節と節を繋ぐ接続助詞は徐々に文末表現として定着してきたと考えられる。このカラは、文末に使われることによって新たに「対人関係的機能」が付与され、やがて主節の存在と関係なく、独自で話者の心的態度を表せるようになり、我々日常会話で見られる文末のカラがこうした言語変化の過程にあることを明らかにした。

参考文献

- 大浜るい子 (2006) 『日本語会話におけるターン交替と相づちに関する研究』 溪水社.
- 荻原孝恵 (2012) 『「だから」の語用論—テキスト構成的機能から対人関係的機能—』 ココ出版.
- 甲田直美 (2001) 『談話・テキストの展開のメカニズム—接続表現と談話標識の認知的考察—』 風間書房.
- 此島正年 (1966) 『国語助詞の研究 助詞史の素描』 桜楓社.
- ザトラウスキー・ポリ (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』 くろしお出版.
- ザトラウスキー・ポリ (2003) 「共同発話から見た「人称制限」, 「視点」をめぐる問題」『日本語文法』 Vol.3, No.1, pp.49-66.
- 白川博之 (1995) 「理由を表さない「カラ」」 仁田義雄 (編) 『複文の研究 (上)』 pp.189-219 くろしお出版.
- 白川博之 (2009) 『言いさし文の研究』 くろしお出版.
- ジェフリー・N・リーチ (著), 池上嘉彦, 河上誓作 (訳) (1987) 『語用論』 紀伊国書店.
- 時枝誠記 (1950) 『日本文法 口語篇』 岩波書店.
- 橋本進吉 (1964) 『助詞・助動詞の研究』 岩波書店.
- 許夏玲 (2010) 『意味論と語用論の接点からみる話し言葉の研究』 白帝社出版.
- 堀口純子 (1988) 「あいづち研究の現段階と課題」『日本語学』 Vol.10, No.10, pp.31-41 明治書院.
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』 くろしお出版.
- 前田直子 (1991) 「「論理文」の体系性—条件文・理由文・逆条件文をめぐる—」『日本学報』 Vol.10, 大阪大学文学部日本学研究室.
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文: 条件文と原因・理由文の記述的研究』 くろしお出版.
- 松田陽子 (1988) 「対話の日本語教育学—あいづちに関連して—」『日本語学』 Vol.7, No.13, pp.4-11 明治書院.
- 水谷信子 (1987) 「外国語の修得とコミュニケーション」『言語生活』 Vol.344, pp.28-36.
- 水谷信子 (1993) 「「共話」から「対話」」『日本語学』 Vol.12, pp.4-11 明治書院.
- メイナード・泉子・K (1993) 『会話分析』 くろしお出版.
- 山口堯二 (1996) 『日本語接続法史論』 和泉書院.
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』 宝文館.

Halliday, M.A.K (1970) 「Functional Diversity in Language as seen from a Consideration of Modality and Mood in English」『Foundations of Language: International Journal of Language and Philosophy』 Vol.6 pp.322-361.

用例出典

- ドラマ『プロポーズ大作戦』 1-11話 (フジテレビ 2007年)
- ドラマ『GOLD(ゴールド)』 1-11話 (フジテレビ 2010年)